

書叢究研濟經  
輯五十三第  
剖解の義主會社家國  
君郎治榮合河

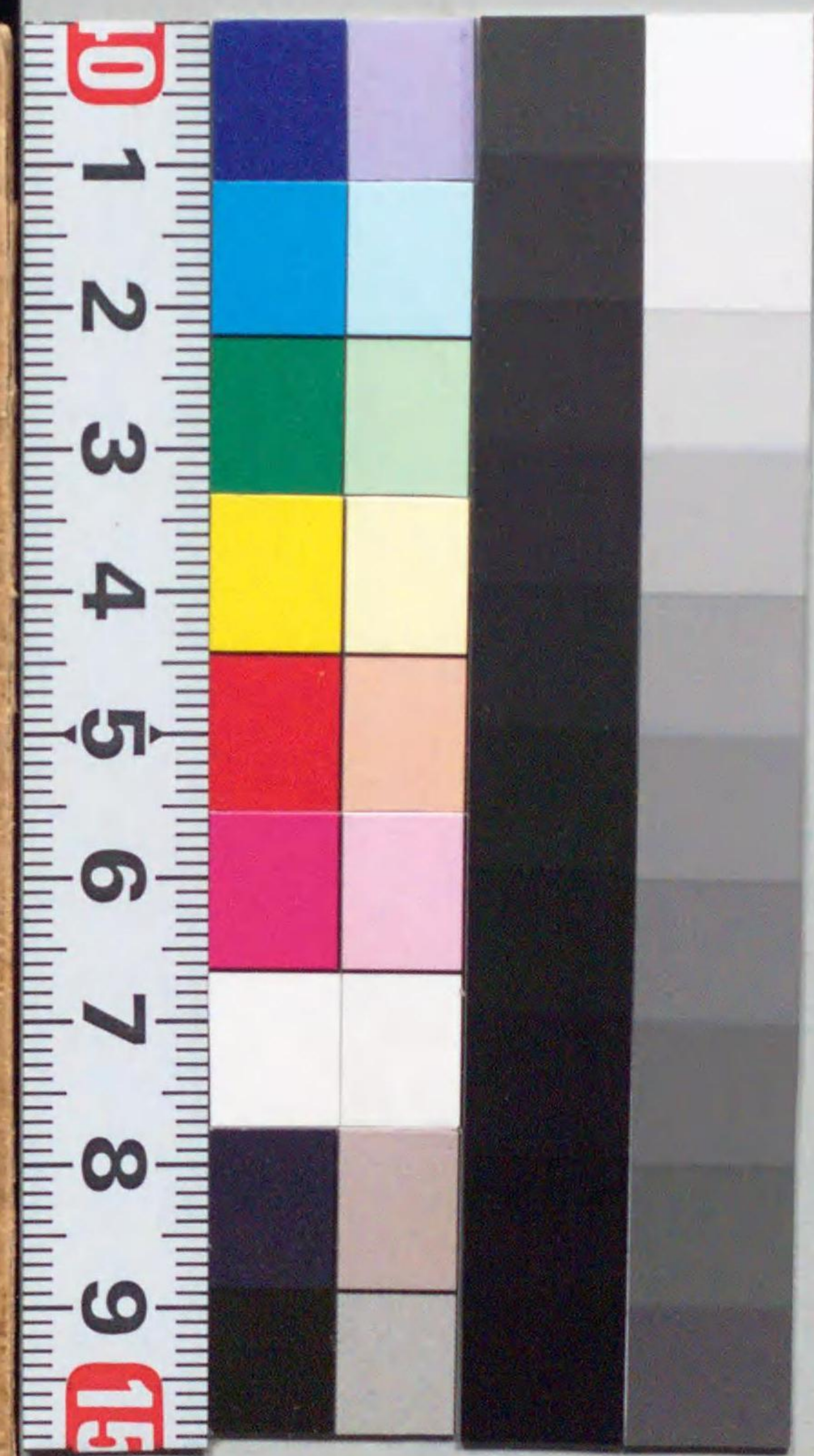
河合榮治郎  
國家社會主義の解剖

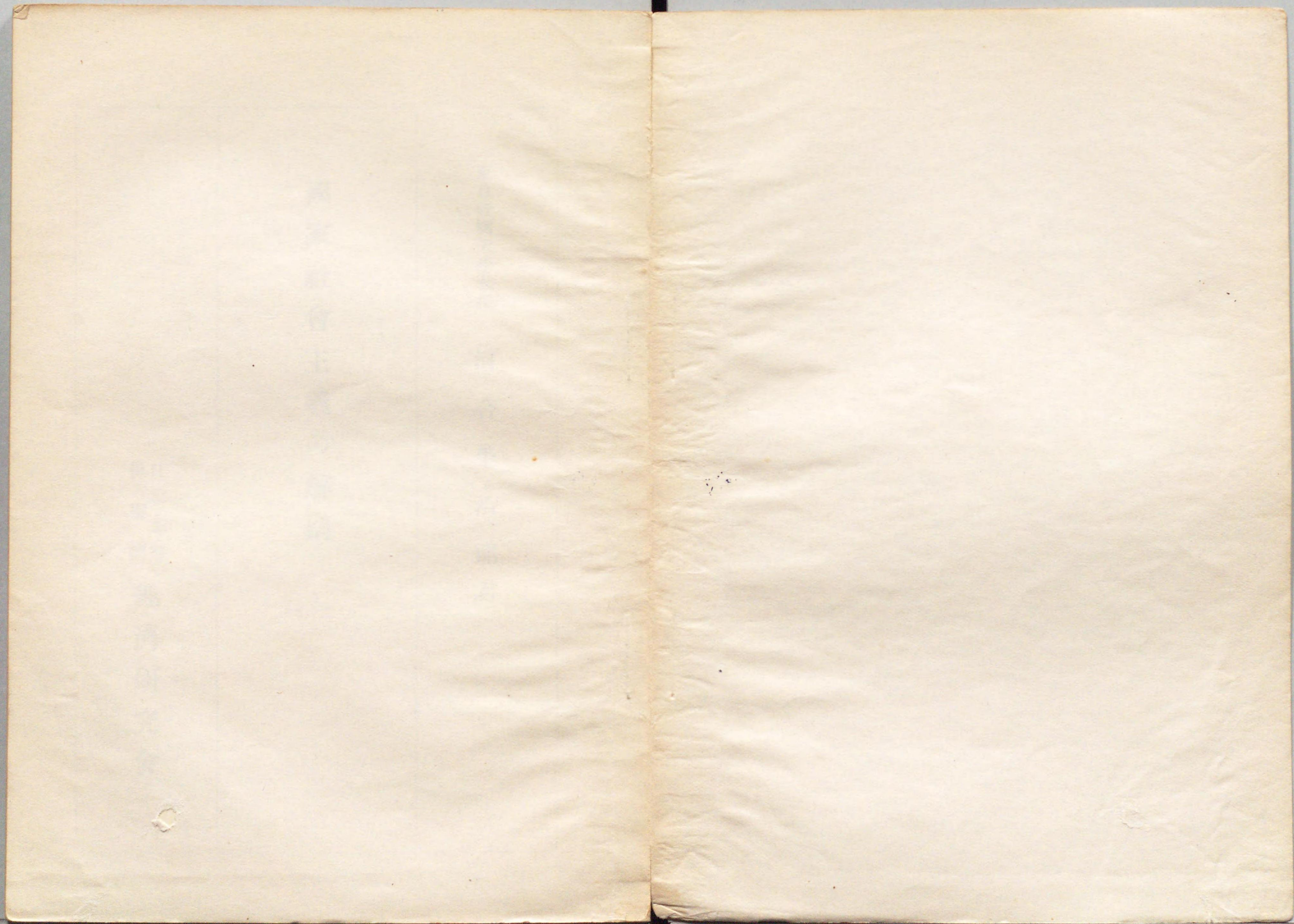
Y994  
J6558

部樂俱業  
會究研

叢A  
45  
35

叢A  
45  
35





東京帝國大學教授 河合榮治郎君

國家社會主義の解剖

日本工業俱樂部  
經濟研究會

Y994-J6558

### 凡 例

本輯は昭和七年二月二十五日開催の當會例會に於て東京帝國大學教授河合榮治郎君の試みられた「國家社會主義の解剖」と題する講演の筆記であつて會員の参考に資せんが爲膽寫に代へて印刷に附したるものである。但し講師の校閲を経たもので無いから文責は凡て記者に在る。

昭和七年三月

日本工業俱樂部

經濟研究會



I 種  
W



\*1200800669845\*

Y994-2658

日本工業界連合会

日本工業界連合会

昭和十三年三月

出版

本書は、昭和十三年三月二十一日開演の演説を録音したものである。演説の内容は、日本工業界連合会の機関紙「工業界」に掲載された。本書は、日本工業界連合会が、昭和十三年三月二十一日開演の演説を録音したものである。演説の内容は、日本工業界連合会の機関紙「工業界」に掲載された。本書は、日本工業界連合会が、昭和十三年三月二十一日開演の演説を録音したものである。演説の内容は、日本工業界連合会の機関紙「工業界」に掲載された。

目次

# 目次

- 一 國家社會主義の要旨……………三
- 二 國家社會主義の特異點……………六
- 三 國家社會主義の由來……………三二
- 四 國家社會主義の批判……………六三
- 五 國家社會主義の歴史的意義……………九〇

五 國家社會主義の歴史と意義 ..... 5  
四 國家社會主義の世評 ..... 10  
三 國家社會主義の由来 ..... 15  
二 國家社會主義の發展 ..... 20  
一 國家社會主義の實行 ..... 25

# 國家社會主義の解剖

東京帝國大學教授 河合榮治郎君

最近の日本の社會思想の中で注目すべき運動が二つあるかと思ふのであります。一つはファシズムの擡頭であり、今一つは國家社會主義の擡頭であります。此兩者は關聯して居ると云ふ説もありまするけれども其裏面の關聯に付ては私は精しい消息は存じませぬが、表面に現れて居る理論だけから言へば、ファシズムと國家社會主義とは必ずしも同一のものではないのであります。従つて

國家社會主義それ自身だけを引離して解剖を試みて見たいと思ふのであります。最近國家社會主義と云ふことを言ひ出した理論的の代表者は社會民衆黨の赤松克麿氏であります。同氏が色々の雜誌、パンフレット等に於て國民社會主義と云ふ名前で呼んで居りますが、是は國家社會主義と同じものであります。更に故高島素之氏が國家社會主義を唱へたことは既に可なり前のこととてありますが、最近に五錢程の極く小さなパンフレットとして、國家社會主義大義と云ふものが出て居るのであります。今私は赤松氏の國家社會主義と云ふものに付きまして、此要目に掲げました其要旨を簡単に御紹介致さうかと思ふのであります。

## 一 國家社會主義の要旨

私は一つの社會の思想がある場合に、其思想に對しては三つの觀點からどう云ふことを内容として居るかと思ふことを聞きたいと思ふのであります。其第一は其思想は如何なる哲學を持つて居るかと思ふこととてあります。其次に其思想は現存の社會秩序即ち資本主義と云ふものに對して如何なる態度を取るかと云ふことが第二であります。最後に其思想は自己の思想を實現する爲に如何なる實現の方法を取るかと云ふことが第三であります。此三つの項目を提げて回答を要求するのであります。今國家社會主義と云ふものに對して

も此三點に分けて説明を聞きたいと思ふのであります。

四

先づ第一に國家社會主義は如何なる哲學を持つかと云ふことではありませんが、固より國家社會主義者は哲學と云ふ程の體系だつたものを所有致しては居りませぬが、併し哲學の中の一つの部分として社會哲學と云ふものは持つて居る譯であります。それが即ち國家主義或は國民主義と稱する社會哲學を持つて居る譯であります。然らば國家社會主義者の言ふ國家主義と云ふもの、或は國民主義と云ふものはどう云ふものであるかと云ふことを申すならば、今赤松氏の書いた物から引用してお話すると云ふと、斯う云ふて居ります。「マルキシズムから言へば國家主義とか國民性と云ふものは反動主義であ

る。こんなものはブルジョアジイの主義である。プロレタリアはインターナショナルである。國家と國民とを口にすることが一つの反動的シヨビニズムと云ふのであります。私は其處に共產主義者に一つの偏見があると思ひます。」斯う云ふことを赤松氏が言つて、マルキシズムが言ふやうな意味で國家主義と云ふものは決して反動的なものではないと云ふことを先づ述べ、次でマルキシズムから云ふと、國家と云ふものは其時の支配階級が被支配階級を搾取する所の強制の權力機關であると云ふ風にマルキシズムは解釋して居り、従つて階級の對立がなくなつて、階級の支配と云ふもの、必要がなくなる時は強制權力の必要がなくなるのである。従つて國家と云ふも

五



六  
のは其時に死滅するのであると云ふのが、マルキシズムに於ける國家觀であります。之に對して赤松氏は、「さうではない、國家は人類の生活を統制する權力として絶対に必要なものである。それが死滅して必要がなくなる時と云ふのは、餘程前途——五百年か千年と云ふ程の一寸見透しの付かない前途は別として——人間性が現在の儘である限りに於ては國家の存在が消える時はない」、斯う云ふ風に赤松氏は考へるのであります。従つて斯の如き強制機關としての國家の存在が必要であるから、國家と云ふものは何時になつても其存在がなくなるかと云ふ時はないのであるから、其國家を尊重して行く所の國家主義と云ふものは決して反動主義ではなくして、進歩主義と相

結合し得るものであると云ふ風に説明してあります。之が赤松氏の書物に現れて居る所の國家主義の説明であります。然らば國民主義と云ふものに對して赤松氏はどう解して居るかと云ふと、「從來社會主義と云ふものはマルクス主義から出て居るのが一般であつて、マルキシズムは社會主義の國際性と云ふものを常に唱へて居た。併しながら此國際主義と云ふものは抑々アダム・スミスから始まつて、マシエスタイ學派に依つて叫ばれた所謂ブルジョア思想であつたので、世界が是等のブルジョア學者の言ふやうに世界的經濟が成立するならば、國民意識と云ふものは當然になくなり、萬國共通の國際社會と云ふものが出來上る、斯う所謂ブルジョア學者は考へた。

其考へを踏襲してマルクス、エンゲルスは國際主義と云ふことを唱へたのである」と云ふのであります。「然るに十九世紀末以來ブルジョアの方の資本主義社會が既に國際主義から非常に轉向をして來て居る。従つてブルジョア學派の思想が國際主義から國民主義の方へ又更に轉化をしたと云ふ著しき變化がある。」氏は斯う云ふ風に言ひまして、「工業が輕工業から重工業へと移るに従つて、昔の自由貿易主義は保護貿易主義と變つた、往年の門戶解放主義は門戶閉鎖主義に變つた、往年の國際的自由競争主義は國家的獨占主義に變り、昔の世界平和主義は武力對立主義となつた。國際的分業に基いた單一的世界經濟は世界主義的經濟の方向へ進んで來た、之が即ち資本主義

時代が國際主義から國民主義へと轉向して來たことであるが、此變化に伴つてプロレタリアと云ふものも亦國民主義的になつて來た」と云ふのであります。曰く「ブルジョア・インターナショナルは斯の如くにして以上のやうに破壊された。然らば萬國のプロレタリアはどんな立場に置かれたか、優勝國民のプロレタリアは高き生活水準を獲得して、弱小國民のプロレタリアは低き生活水準を押し付けられた。」以下一寸略して、「亞米利加のプロレタリアは日本のプロレタリアの移入を拒否し、且亦既に行つて居る所の日本プロレタリアに對して民族的差別待遇を強要した、茲に於て萬國のプロレタリアを貫く横斷的な連帶主義意識は必然に稀薄化せざるを得なくなり、人類

の歴史は階級闘争の歴史ではなくして、縦の階級が闘争をする歴史であると共に、横に民族が闘争する所の歴史である。国内的に階級と階級との生存闘争があると同時に、國際的に國民と國民との生存闘争があることは、世界歴史が吾々に提示する現前の事實である。斯う氏は述べて居るのであります。「斯の如くブルジョアが國民主義的になると同時にプロレタリアが國民主義的になつたと云ふ、此現實の認識を吾々はしなければならぬ。此認識の上に社會主義を如何に實現するかと云ふ問題が起つて來るのである。」斯う云ふのであります。之が赤松氏に現れたる哲學とも云ふべきものゝ、一片鱗であつて、國家主義と社會國民主義と云ふ社會哲學をそれだけ拾

つて見たのであります。

そこで第一に私は赤松氏に對して、然らば斯の如き哲學を持つ所の赤松氏は、現存資本主義の社會に對して如何なる社會をそれに對する對案として考へるかと云ふことを聞きたいと思ふのであります。之に對して赤松氏は社會主義社會が對案であると云ふことを答へられると思ふのであります。それに付ての精しい説明は氏の最近の論文著書等には現れて居りませぬが、從來の氏が述べて居る所の言葉は總て社會主義者として述べて居るのであつて、當然のこととしてそれは言はなかつたに過ぎないと私は思ふのであります。

そこで最後に然らば氏は其社會主義をどうして實現したら宜いか

と云ふその實現方法に就て私は聞きたいのであります。之に付て今迄の同氏は、社民黨の書記長として従來唱へて居た立場は、議會を通じて社會主義を實現しやうと云ふ立場である、従つて議會の外に於て暴力の革命に依つて社會主義を實現しやうと云ふ共產主義と劃然として對立して居たと思ふのであります。更に共產主義の階級獨裁と云ふ思想にはつきり對立して言論の自由と云ふことを唱へて、獨裁に反對をして居ると云ふやうに私は感受するのであります。之に付ては氏の思想は最近に可なり變つて來て居るやうであります。どう變つたかと云ふことに付て明瞭なことを言つて居ないので、往年の議會主義と云ふものに對して、暴力革命を以て自己の

社會主義を實現をしやうと考へたと云ふ風に私には思へるのであります。更に階級の獨裁と云ふことに反對をして來た氏が、矢張り自己の思想と同じ者の獨裁を是認すると云ふ方向に變つて來たと云ふ風に考へられるのであります。併し是は多分さうだと云ふことを私が前後の文意から想像するのであります。其事を明白には何處にも言つて居ないと云ふことは遺憾なことであるが、多分さう考へて間違はあるまいと思ふのであります。革命と獨裁と云ふことに付ては、氏が明瞭に説いては居ないけれども、社會主義實現の方法として氏が明白に説いて居ることは、「社會主義の實現は國際的協力を俟たないで、國民的に實現しなければならぬ」と云ふことを、實に

明白に言つて居るのであります。同氏の説に依れば、「世界のプロレタリアが既に國民的になりつゝある、日本のプロレタリアと亞米利加のプロレタリアとの間と云ふものは、何等連帶的な意識はないのである。亞米利加は亞米利加のプロレタリアの爲には日本のプロレタリアを犠牲にすることを少しも躊躇しては居ないのである。従つて外國のプロレタリアに依頼して社會主義を實現すると云ふことは夢である、斯の如き社會主義を實現して見た所で、一つの社會主義國と、他の社會主義國との間に又民族闘争が行はれると云ふだけであつて、世界が平和に統一されると云ふが如きことは一場の夢に過ぎないのである。然るに此夢を徒に追つて、世界平和が今直ぐ來るか

の如く考へて、外國のプロレタリアに依頼して自國の社會主義を實現しやうと云ふ夢を見て居るのが即ち共產主義者である、吾々は各國プロレタリアが國民的であるが故に決して外國のプロレタリアに依頼することは出來ないのであるから、自國に於てのみ自國の社會主義の實現をしなければならぬ。莫斯科の命令を至上命令として奉戴するが如きは實に愚劣千萬である」と言つて、社會主義の國際主義と云ふことを以てそれを排斥して居るのであります。

其處迄は自國に自分の國家社會主義を實現すると云ふ場合に、他國の社會主義者に依頼をしないと云ふ一つの消極的のことに止つて居るのでありますが、更に一步を進めて、氏は「各國プロレタリア

は自己の生存權の確保を第一義として社會政策を決定するのである」と云ふことを言つて居る。自分の生存權の爲であるならば、他の國の生存と云ふことの如きは考慮に置く必要がないと云ふことを明白に言ひ切つて居るのであります。此點から言ふならば、日本のプロレタリアの爲には支那のブルジョアは勿論、支那のプロレタリアを犠牲とすることも敢へて差支ないと云ふ結論が出て來る譯であります。即ち國家社會主義は茲に至つて外國への侵略主義と云ふ形を取つて來る譯であります。

國家社會主義の要旨と云ふのは、赤松氏の最近の著書論文に據れば、以上の如くに内容は極めて簡單であります。諄いやうですがもう

一遍繰返すならば、其哲學に於て敢へて組織的な體系的なものを持つて居ない。併しながら國家主義と云ふもの及び國民主義と云ふ一つの社會哲學的な片鱗を持つて居ると云ふことが一つであります。次に資本主義に對して國家社會主義者は何を對案とするかと云ふ場合に於て、私有財産、殊に生産手段の廢止された社會主義社會が資本主義社會に對する對案であると云ふことを言ふて居る譯であります。然らば斯の如き社會主義を如何にして實現するかと云ふ、其方法に付ては、他國のプロレタリアに依頼をせず、自國のプロレタリアのみで實現をしやうと云ふ、國際性を否定すると云ふことに一つの要點がある。更に積極的には他國を侵略することも可なりと云ふ

侵略主義と云ふものが這入つて居る、自國の中ではどうするかと云ふならば、革命と獨裁を敢へて厭はないと云ふことを含んで居ると云ふこと、之が國家社會主義の簡単な要旨であります。

## 二 國家社會主義の特異點

そこで斯の如き内容を持つた國家社會主義と云ふものと他の思想と比較するならば何處が違ふかと云ふことを申上げると云ふと、資本主義と云ふ思想を持つて居る人があるとして、其人が模型的な、本當の模型と云ふべき典型的な資本主義の思想を持つて居るとするならば、それと國家社會主義を比べて何處に違ひがあるかと云ふ

ことを見ますると資本主義と云ふものは、其社會觀に於て、社會哲學に於て、個人主義の上に立つて居るものであると私は思ふのであります。言換れば個人の生計と云ふものが第一義的の重要性を持つものだと云ふことを考へるのが資本主義の本領であり、之に對して國家社會主義の違ひは國家主義と云ふものを採つて居ると云ふことになる譯であります。即ち國家と云ふ社會が第一義的の重要性を持つのであつて、其中の個人は國家に對しては唯集團としての第二義的の重要性を持つに過ぎないと云ふのが國家主義であります。従つて個人主義の立場から言ふならば各個人々々がそれ／＼一つの小さい宇宙を造つて居ると云ふことになる譯であります。國家主義の立

場から言ふならば、個人と云ふものそれだけでは不完全な部分に過ぎないので、完全なる一體は個人が集合した國家と稱する集團が完全なる國家である。其國家の爲に個人が身を捨てると云ふことに依つて個人が生きているのである。詰り日本帝國の國家の發達と發展の爲に吾々個人が死ぬと云ふことに依つて吾々個人が初めて生きる、私共に取つて一番大事なことは日本と云ふ國家の膨脹と發展である。それが爲には個人の如きは第二義的の價值しかないと云ふのが國家主義の主張であります。之が資本主義と國家社會主義と云ふもの、違ふ第一の點であらうと思ふのであります。

第二に此二つの正面衝突をする點は、資本主義と云ふものは自由競争と私有財産制度と云ふものを原則として維持して行かうと云ふ立場を取る譯であります。此點に關して國家主義は私有財産制度を否定して行かう、自由競争制度を廢止して行かうと云ふ、即ち社會主義を採ると云ふ點、其處に此二つの對立が生ずる譯であります。第三には資本主義は原則としては言論の自由を與へる。如何なる階級の言論であらうとも思想言論に對して原則として自由を與へる、唯例外の場合に於てのみそれに干渉を加へるが、原則としては言論の自由を與へる、と云ふのが資本主義の建前であり、更に共同の仕事は社會の全體の同意——出來れば全體の人の同意——少くとも大多數の人の同意に於てのみ社會の共同の事務を處理して行かうと云ふ



こと、それが所謂議會主義と云ふことであります。社會の吾々自身の同意か、或は吾々が選んだ代表者の大多數の人の同意で、社會の共同の事務を處理して行かうと云ふのが議會主義と稱するものであつて、言論の自由を認めると云ふこと、議會を通してのみ社會共同の事務を處理して行かうと云ふのが資本主義の考へ方である。之に對して國家社會主義は自己の思想に對しては自由を要求するが、反對の言論思想に關してそれを彈壓して行かうと云ふ獨裁を主張すると思ふのであります。更に社會の共同の事務を處理するのに議會の如き制度を待つことは手緩いとして、暴力の革命に依つて社會の制度を變革して行かうと考へる。所謂暴力革命主義と云ふものを採つ

て行かうと考へるのであります。此點が第三の對立點であらうと考へるのであります。要するに資本主義と國家社會主義との違ひは、前者が個人主義であるのに對して、後者は國家主義である。前者は私有財産と自由競争を認めるのに對して、後者は其廢止を主張すると云ふことである。前者が言論の自由と議會を通して行かうと云ふことに對して、後者は獨裁と云ふこと、革命を通して行かうと云ふ所に違ひがあると思ふのであります。

それは國家社會主義と資本主義の差でありますが、翻つてマルクス主義と國家社會主義の差が何處にあるかと云ふことになりましたれば、其差は次の二つの點にあるかと思はれるのであります。即ちマ

ルクス主義に於て國家と云ふものに對する見解が一つある。それとの差が一つ出て來るのであります。マルキシズムに於て國家と稱するものは、所謂階級國家論と云ふものを取つて居りますので、國家に對する吾々の普通の見解に二つあるのであります。一つは階級國家論であつて、一つは文化國家論と云ふものを取つて居りますので、國家と稱する命令強制機關は何の爲に存在して居るかと言へば、其時の壓迫階級が被壓迫階級から搾取すると云ふことを可能ならしむる爲に權力が要る。其權力を行使する機關が即ち國家と稱する機關である。だから現代の國家はブルジョアジイの最高委員會である。其國家のする仕事は總てブルジョアがプロレタリアから搾取を可能

ならしむること、其事だけを是れ努めることが即ち國家と稱する機關の存在の意義である。之がマルキシズムの國家觀であります。此國家觀から當然出て來る結論は、だから革命一度起つて階級對立がなくなる時は、階級の支配がなくなり、搾取がなくなる。搾取がなくなれば搾取を可能ならしむる命令強制の權力の必要がなくなる。即ち其時にして國家は死滅すると云ふ國家死滅説と云ふものが其處から出て來る譯であります。

之に反して國家觀の中でそれと違ふ所の國家觀、文化國家觀、或は民族國家觀と稱する國家觀は、成程社會階級の對立がないことはないが、それは社會生活の一場面に於てのみ斯の如き階級對立があ

る。例へば經濟と云ふ風な生活の場面に於ては階級の對立はあるが、其外の場面、文化即ちクルツア―と云ふ場面、其他社會には色々な場面があつて、經濟だけが唯一の場面ではない。斯の如く他の場面に付ては必ずしも階級が明瞭に對立して居る譯ではないのである。従つて社會國家と稱する社會が爲す所の仕事は、其時の支配階級の爲だけをするると云ふのではなくして、超階級的な仕事が多分に社會にはあるのである。其階級の何れにも囚はれない超階級的な仕事をやると云ふ所に國家の使命があるのである。其使命を果す爲に國家存在の理由があるのであると斯う考へるのが文化國家觀、或は民族國家觀であります。此國家觀を取る人の當然の結論は既に斯の如き

超階級的な仕事は社會にある、それをするのが國家であると云ふこととてありますが、此超階級的な仕事を、それでは何故命令強制を使ふ必要があるのか、個人の意思に反して敢へて國家が命令と強制をしないと云ふ權力を行使する必要があるかと云ふならば、それは人間の性の弱さと貧弱さと云ふものが、未だ各人の心の則に任せて所謂則を越えずと云ふやうに、多くの人間が未だ其處迄發達して居ないとか、又現在のやうに發達の途中にあつて完全な發達をして居ないやうな現在の人間性であるならば、命令と強制を國家が用ふるのだから秩序が保たれない、従つて其處に國家存在の必要があるのである、だから人間性が現在と非常な飛躍をしない限りに於ては國家

は必ず長く存在を繼續するのである。國家が死滅して宜いと云ふ時は五百年、千年と云ふやうなずつと未來のことになるのであらう。斯様なことから國家死滅説に反對をするのであります。此國家觀はマルクス主義者と國家社會主義者との間に對立する所の一つの點であります。

今一つ違ひの出て來るのは、マルクス主義はマルクス、エンゲルスの千八百四十八年の共產黨宣言以來、同宣言の最後の所で「労働者には祖國がない、萬國の労働者よ團結せよ」と云ふことを言ふて最後を結んだ以來、萬國のプロレタリアが團結すると云ふ國際主義と云ふものは、マルキシズムに學ぶ所の必然の一要素を爲して來た

のであります。之に對して國家社會主義は先程述べたやうに國際主義を否定して、一民族内に於ける民族性と云ふものに重きを置いて居り、民族内だけを一單位として、其處で社會主義の實現をしなければならぬ。斯う考へて居るのであります。國際主義に對立する國民主義と云ふことがマルクス主義と國家社會主義との違ふ所の第一の點であらうと思ふのであります。

今一つ比較をするのは同じ社會であつてもマルキシズムと全然異つた立場に立つ所の英國の社會主義、英國労働黨が採つて居る所の社會主義と云ふものと、國家社會主義と云ふものとは、何處が違ふかと云ふ點になりますれば、其差の第一は英國の社會主義は其哲學

に於て個人主義を採つて居る。個人の生計と云ふことを第一義的に重要性のあるものだと考へて居ること、従つて個人が生計する爲には國家が必要であると云ふ點から、國家の存在は認めるけれども、國家は個人の集團であつて、個人の生計が第一義的なものであると云ふ個人主義を採つて居る點、之に對して國家社會主義は、國家主義と云ふ哲學を採つて居ると云ふこと、之が違ふ所の點であります。兩方が社會主義を採ると云ふ點に關しては、兩方の間には違ひはない譯であります。國家社會主義も一つの社會主義であり、英國の社會主義も一つの社會主義であつて此點の違ひはないが、英吉利の社會主義の場合に於ては社會主義を實現する方法として暴力革命を

斷乎として排斥をして議會主義を主張して居り、階級の獨裁に反對して、言論の自由主義を採つて居ると云ふことが、英國の社會主義の特長であります。之に對して國家社會主義は階級の獨裁と、社會革命を唱へて居ると云ふことは、英國の社會主義と區別せらるゝ點であります。

以上の如く現在存在する所の三つの思想、マルクス主義と英國的社會主義と資本主義思想と云ふものゝ三つを擱へて來て、それと國家社會主義と何處が違ふかと云ふ諸點、之を項目を並べてお話をした次第であります。

### 三 國家社會主義の由來

第三に國家社會主義の由來と云ふことであります。國家社會主義と云ふものは、社會主義と國家主義とが結合した産物であります。國家主義の方から社會主義の方に接近をしたとも言へるし、社會主義の方から國家主義の方に接近をしたとも言へる譯であります。要するに國家主義と社會主義の兩方の結合から出て來たものであります。そこで問題を二つに分けて何故國家主義と云ふものが社會主義の方に結合するやうな風になつて來たのか、何故千九百三十二年の日本に於て國家社會主義と云ふものが大きな勢力を持ちかけて來た

のかと云ふことを説明する必要があるのであります。何故國家社會主義と云ふものが成立するやうになつて來たかを國家主義の方の側から一つ見ることに、一つは社會主義者も何故國家社會主義と云ふものを成立させるやうに變つて來たかと云ふ社會主義の方の側から見るのと、二つに分けて説明する必要があると思ふのであります。それは國家主義は何故最近に於て國家社會主義と云ふものに接近したか、又國家社會主義と云ふ風な名前に依つて新しい形を採つて、何故國家主義と云ふものが最近に大きな勢力を以て頭を持上げて來たかと云ふことの説明を第一に致す譯であります。其點から言へば國家主義と云ふものは明治以來に於ける所の日本國民の傳統的な強

力なる思想であると私は解釋するのであります。即ち日本の國家と云ふ團體——社會が吾々に取つて第一義的の重要さがある、日本帝國の維持、膨脹、發展が私共に取つて多大の價值のあることであつて、吾々個人と云ふものはそれに對する集團的な枝葉な第二義的な價值しかないものであると云ふ、さう云ふ國家主義と云ふ思想は明治初年以來に於て牢固不拔の勢力を以て吾々を支配した考へ方であると思ふのであります。それは何故かと云ふならば、一體或る國が個人主義の國であるか、國家主義的な國であるかと云ふことの、一番それを區別させる大きなことは、其國の對外關係が一番大きな勢力を持つて居ると思ふのであります。此點から言つて日本の對外關

係と云ふものを明治初年以來考へて見ますならば、三つの時期を劃して來たやうに考へられるのであります。第一は外國が日本の獨立を脅威して居る、或は外國が日本に對して不平等の待遇をして居ると云ふことを排斥しやうと云ふ時代であります。之が明治の初年から明治二十年代に至る迄續いた事態であらうと思ふのであります。明治初年に外國の日本の獨立に對する脅威は相當あつた、之を排斥して獨立を完全にすると云ふことの必要があつたと云ふこと、日本に對して治外法權を外國が持つて居ると云ふこと及び日本の關稅自主權と云ふものを認めないで、不當な關稅と云ふものに對する外國の一つの壓迫を蒙つて居たと云ふこと、要するに不平等待遇を外國

から強制されて居たことを押除けて、自國の獨立を完全にし、平等の待遇の所に到達しやうと云ふのが第一期であります。丁度支那が今日此時期に相當するであらうと考へるのであります。斯う云ふ時期が一つあつて、明治初年に略々外國から來る獨立の侵害の脅威は排斥し得たと云ふこと、其後に於ては、時期は少し後であります、條約改正と云ふことをやつたと云ふことが、第一期に於ける日本の任務を完了した一つの現れであらうと考へるのであります。第二期と云ふものは明治二十年代から三十年代の末期、或は四十年代の初期位迄を占めて居る所の時代であつて、日本と同等の力を持つて居る所の外國が、日本の隣接國の獨立を侵害すると云ふ脅威があつて、

其爲に間接に日本の獨立が脅威をされると云ふ懼れがある場合に、それを排除しやうと云ふ時代であります。具體的に言ふならば朝鮮と云ふ日本の隣接國の獨立を害しやうとする支那及び露西亞と云ふ、日本と大體同じやうな強國があつて、朝鮮の獨立が是等の強國に脅威されると云ふことであつて、間接に日本の獨立の脅威を受けると云ふことの爲に、結局日本の獨立を確保して行くと云ふ時代が即ち第二期でありまして、此現れが日清戦争となり、後に於て日露戦争となつた、之が第二期で明治二十年代から四十年代の初期に繼續して居るやうに考へるのであります。此二つの時期は何れにしても外國からの不平等であつたものが平等の域に達しやうとする日本



の努力時代、又間接に之が日本の獨立を確保しやうとする緊切な境遇に日本が立つて居たと云ふ譯でありまして、國民の心が一齊に外に向はねばならない時であつて、其時に於ては個人の生計及び生存と、國家の維持と云ふものとは、二つにして一なる程の密接な關係を持つて居たと思ふのであります。若し國家の獨立が害せられるならば、個人の生計と云ふものはあり得ない、如何にして國家の獨立を確保するかと云ふことが、前面に大きな力を以て現れて、第一義的の重要さを持つて居たと云ふことは、誠に肯かれるのであります。斯して明治二十年から四十年代に至る迄の間に國家が第一義的重要性があると云ふ國家主義と云ふものが抜くべからざる大きな力を以

て私共に迫つたと考へるのであります。第三期は日露戦争が片付いてから後で主として滿洲及び蒙古に對する日本の發展の時代と云ふものが其處に來たと思ふのであります。滿蒙に對する關係も、滿蒙は日本の生命線であると云ふことを言つて、さうして結局滿蒙を失ふならば日本の生存が全うし得ないと云ふことの説明が屢々爲されるし、又或る意味に於てはさう云ふ説明が出来ないこともないと思ふのであります。併し明治の初期の第一期のやうな直接な日本の獨立の脅威といふ譯ではないし、第二期のやうに間接ながらも日本の獨立の脅威をされて居るといふ譯でもないのであります。第三期に這入つて日本の對外關係は明かに別箇の領域に踏込んだと思ふので

あります。新たなる日本の獨立といふ問題は既に確信して、是以上發展膨脹をするかどうかといふことの、今は新しい場面の第三期に踏込んで居ると思ふのであります。従つて此時期に於て初めて國家といふものが持つ重要性が前面から稍々退いて來て、個人といふものゝ重要性が前面に現れて來るのが、漸く此時期に出て來たと私は考へるのであります。明治四十年代の初期から後に於て、文藝界に於ける自然主義、ローマンテイシズムの流行、政治思想界に於けるデモクラシーの流行、經濟思想界に於ける社會正統學派の擡頭、其後でサンヂカリズム、ギルドソシアリズム、マルキシズムの流行といふやうなこと、總て是は今迄外を向いて居たものが内を顧みて、外交

に重きを置いて居たものが内政に重點を置き國家の維持と云ふものに重きを置いて居た者が、如何に個人を生計させるかといふことに觀點が變つて來たと思はれるのであります。此點から考へて日本の國家主義といふものは第一期と第二期に於て非常なる勢力を植付けましたが、第三期の時に於て轉化の機會に出會つて來たと考へるのであります。併しながら本當の意味に於て國家主義と云ふものを意識させることと云ふことを教育方針として政府が努力をし始めたといふ時は寧ろ第三期に這入つた初めであると思はれるのであります。小學校及び中學校の教壇から國家主義といふものを頻りに鼓吹させやうといふことを考へたのであります。其他在郷軍人とか青年團といふ

者たちの集團を拵へて、其處から國家主義を又教育しやうといふやうなことを考へ出したといふのは是は第三期に於て寧ろ初めて行はれたのでありまして、前二期は自然に、必然に放任をして置いても、國家主義の思想が勢力を持つて居つた譯であります。第三期に於て國家主義が衰亡の兆があるといふことを見た時に、初めて國家主義的教育の意識的な努力が始まつたといふ風に考へるのであります。

そこで私共のやうな三十代の末期から後の人は、以上の第一期第二期に育てられた爲に、國家主義の勢力を吾々は根底深く植付けられた。其三期の後で育つて來た所の今の三十五六年から以下の人は、國家主義の時代ではないが國家主義教育を意識的に向けられて來た

といふ時代に育つたといふことの爲に、何れも老幼を問はずして國家主義といふものが、日本人に抜くべからざる堅い一つの思想として植付けられた。唯僅に其人自身が特別に思索的努力をして抜けた者自體が國家主義から別の思想に變ることが出來たものであるといふ風に考へるのであります。日本國民を通して一つの國家主義といふ思想が、強力なる所の思想として明治以來一貫して來たといふやうに私は考へるのであります。然らば其處に當然起つて來る所の疑問がある。それは成程君の國家主義が明治以來一貫した所の日本人の思想であるといふことを唱へたとしても、經濟界を見るならば資本主義といふものが假令外國から後れて發達をしたにしても、兎も

角世界の一流の資本主義國として日本に確立をして居る其資本主義といふものが、結局個人主義的な見解を基調として居るものである、自由主義といふものを取入れて居る所の制度であるならば、資本主義が經濟界に確立すれば、其制度は當然に個人主義的な思想、自由主義的な思想といふものを日本に入れなければならぬ筈だと思ふが、それらの思想といふものは、此國家主義とどういふ風に正面衝突をしたであらうか、或は正面衝突をしなかつたであらうか、しても勢力が微弱であつたのかといふ一つの問が起り得るのであります。成程自由貿易主義といふものが、資本主義と共に日本に移し植えられたといふことは確かであります。言論の自由といふことは憲法の

條章に明白に規定されて居ることは確かであります。議會といふ制度が憲法で與へられたことも確かであります。此言論の自由とか、私有財産であるとか、自由放任主義であるとか、議會制度であるとか、皆是等は國家主義といふこと、對立した個人主義といふことの上に咲いて居る所の一つの花である、此花が移し植えられた、其花を開かせた所の本の木に個人主義が當然日本に開かなければならぬと思ふのであります。それならば其當然の國家主義といふものといふことと反撥し對立し鬭争しなければならぬ筈であるかどうかといふ問題であります。私は之に對して斯う考へるのであります。資本主義の發達の模型的な國を英吉利に求めますれば、英吉利といふ國と對立して

獨逸及日本といふ國は一種異質的な資本主義の發達をした國といふことを私は認めなければならぬと思ふのであります。英吉利に於ては資本主義が個人主義といふ思想の下に發達して來たけれども、資本主義發達の段階がまだ幼稚であつた獨逸や日本は、先進の資本主義國に追付く爲に——日本といふ國が英吉利に追付く爲に、獨逸といふ國が英吉利といふ國に追付く爲に——言換へれば國家主義といふものに資本主義といふものが移し植えられたといふことであります。即ち英吉利に於ては資本主義といふものを拵へた、個人主義は國家主義と戦つて、それを倒しながら個人主義といふものは伸びて來た。それが資本主義と云ふ制度を拵へたに對して、獨逸及日本に

於ては國家と云ふものが寧ろ主になつて、さうして資本主義といふものを養成し其發達を促成して兎も角是だけの資本主義國にして來たといふことであります。従つて英吉利に於て資本主義の發達とは、國家主義を排除して國家主義と戦つて、それを破つて資本主義の制度といふものが發達して來たのに對して、日本に於ては國家主義といふものゝ懷ろの中に抱かれて來ながら資本主義といふものが成長して來た。従つて資本主義を貫いて居る個人主義は成程個人主義の思想である自己を育て、來た所の國家主義の許す範圍内に於て、微弱なる個人主義の思想が日本に植えられたに過ぎない。一たび其思想が國家主義と個人主義と衝突することになれば、其個人主義を育

てた所の本である國家主義は、同時に個人主義を押し潰したに相違ないといふ風に私は考へるのであります。

今一つ考ふべき所の問題は、日本に於ける所の教育制度及法律制度又議會制度といふ風な、多くの國柄が其事自身に必要であるが爲に、外國からさういふ進歩した思想を取入れたといふことよりも、寧ろ日本に於ける國家が先進國と比して劣らないものであるといふ體裁を整へて、さうして平等の條約改正をさせるといふことの爲に、日本の文化を不自然に促進せしめた嫌ひがあつたといふ風に考へるのである。従つて吾々が議會を拵へる前に於ける改進黨や自由黨の努力を無視する譯ではないけれども、國民の大衆の中から議會の必

要を本當に確信するといふ所まで來ない中に、議會制度といふものを逸早く日本に植付けた。先進文明國と總て外部的體裁を同等に整へるといふことの爲に急いだといふことを考へられるのであります。此點から考へても國家を西洋の國家と同一ならしめるといふことの最大主旨の爲に色々の制度が移し植えられたといふならば、當然に個人主義といふものが微弱な形だけしか日本に這入り得なかつたであらう。斯ういふ風に私は今の問題に對しては答へたいと思ふのであります。斯の如くにして外國に於ては其國家主義と對立して、それを負かして來た所の個人主義といふ風な思想が日本に於ては遂に國家主義といふものと正面衝突をするだけの力を持たないで今日

まで来たといふことであります。

所が以上の如くに述べた國家主義が日本人の牢固不拔の精神であつたとしても、それは要するに無意識の世界に勢力を持つて居つた、潜在的に勢力を持つて居つたといふに過ぎないのである。それが而も最近千九百三十一年、三十二年に掛けて、無意識が有意識となり、潜在が現在となつて噴出して来たといふことは何故であるか、斯ういふ問題がそこで起きる譯であります。

其理由を二三拾ひ上げて見ますならば、第一に最近に於ける所の資本主義の發展が行詰つて、さうして各方面に經濟的な不況といふものが現れて居る。そこで下層階級が非常に苦境に立つて居る。

斯ういふ事實が酷く現れて来たといふ時に於て、此下層階級を救ふといふことの爲には、或は中産階級を救ふといふことの爲には今までのやうに無政府的な經濟社會に委して置かないで國家といふ強力なる所の權力の主體が強くと現れて来てさうして何等か英斷を加へるのでなければ、此經濟界の不況を打開し、下層階級、中、小階級を救ふといふことは不可能になるといふ風に考へさせた。言ひ換へれば此社會問題の發生といふことが、之を解決するが爲には國家が前面に現れて來なければならぬといふことから、一つの國家主義といふものを喚び起したのであるといふことが考へられるのであります。

第二には共產主義の跋扈といふことが一つ考へられる。共產主義

が日本の國體といふものを無視し、又ソヴェエツト露西亞の一聯邦に日本をしようといふことを考へたり、吾々の祖國露西亞といふ風に考へて、吾々の先生マルクス、レーニンといふ風な考へ方が——斯ういふ一つの共產主義者の持つ國際主義といふものが——實際勢力に於てどれだけ大きなものがあるかどうかは別として、兎も角も新聞雜誌の上に於て大きな勢力を持つかの如き外觀を呈して居る。此共產主義を根治するといふことの爲には久し振りに強力なる所の國家的統一といふものが、國民の中から目醒めて來たといふことが一つ考へられるのであります。

第三には帝國議會に於ける所の議員の愛想の盡きた行動といふ風なもの、及び政界の巨頭大官の間に於ける色々の瀆職事件といふやうなもの、是等の議會に於ける所の墮落といふものを見て、議會といふものは吾々の共同の社會の問題を委託するには足りないのだ、何か、此外に別な一つの制度を拵へて行かなければならないのだといふことが、又一つの刺戟になつて居るやうに考へられるのであります。

最後に以上のやうな見解から來る結論であつて、又同時に原因のやうになつて來て居るのは、即ち滿洲事變であります。此滿洲事變其ものは國家主義が擡頭してから初めて起つたものであると共に、滿洲事變其ものが無意識に潜んで居た日本人の國家主義を意識化せ



しめ、今まで潜んで居つたものを外に現すことに役立たしめた。之が結果であると共に原因であるといふ風に考へられるのであります。

要するに社會問題の解決といふことが叫ばれて來たといふことが一つ、共産主義の跋扈を押へなければならぬといふ自覺が出て來たといふことが一つ、議會の墮落といふものに愛想が盡きて來たといふことが一つ、そこで滿蒙進出といふことが最後に出て來るといふことになります。是等のことが相重つて最近に於て國家主義といふものがずつと頭を持上げて來たといふことになるのであります。持上げて來たと共に、是等數箇の原因が最近の國家主義の擡頭をなして來た原因であるとするならば、臆て茲に持上つて來た國家主義は、

今から二十年前三十年前の國家主義其儘の形ではなしに、別なものを附加へた一つの國家主義といふ形を採らなければならぬ筈である。何故ならば國家主義が社會問題の解決といふことで擡頭して來たといふことであるならば、其國家は社會問題を解決するといふことを既に考へなければならぬといふことになるし、又共産主義の跋扈を押へるといふことの爲に國家主義が擡頭して來たと考へるならば、共産主義を押へると共に、共産主義に依らなくとも社會問題は解決されるのだといふ別な道を示さなければならぬといふことになる譯である。さういふことから是等の原因が國家社會主義を擡頭させたといふことから、同時に擡頭した國家主義は何か或る一つの社

會主義的色彩を持たなければ、現代に於ては國家主義が擡頭する所の謂れがないといふことになる。即ち國家主義は擡頭したと共に、社會主義の方にずつと接近して來るといふことに依つて、現在に於ての國家主義の擡頭が、初めて理由があるといふことになる譯であります。

以上は簡單であります。國家主義の方から見て、何故最近に國家主義といふものが擡頭したか、最近に擡頭した國家主義が何故社會主義の方に接近して、好意の目を社會主義の方に向けるやうになつて來て居るかといふことの理由を簡單に述べた次第であります。

次で觀點を變へまして、社會主義の方で何故國家主義的な色彩を帯びて、それに歩み寄りをして來たかといふ此問題であります。詰り從來社會主義といふものを唱へてゐた勞働運動家、或は社會主義を唱へてゐたインテリゲンチヤといふ者が、何故一體國家社會主義といふものゝ方に轉向をして來たかといふ理由であります。

其一つの理由は議會といふものに對する失望が國民全體の中に漲つて居る譯ですが、殊にプロレタリア階級、社會主義のインテリゲンチヤの中に、議會主義に對する一つの失望といふものが非常に最近に於て深まつて來た。議會を通じて社會主義を行ふといふことが先づ絶望に近い。希望があるとしてもそれは餘程前途遼遠であるといふ風な考へが出て來て、從來の社會主義者の中で共產主義と對抗

して、常に議會主義を主張してゐた所の社會民衆黨の一團の人々が、議會主義といふものに對して抱いて居つた希望はそれは幻想であるといふ風な考へを持つやうになつて來たといふことが、國家主義の革命獨裁の方に彼等に向け始めて來たといふことの一つの理由であらうと思ふ。

第二には最近の府縣會の選舉に於ける所の勞働者階級の敗北といふこと、更に附加へるならば極く最近の總選舉に於けるプロレタリア階級の敗北といふ風なことが、愈々以て議會へのプロレタリア階級の進出が不可能であるといふことを考へさせたといふことであります。前の方は可なり見透しの附いた長い間を考へに入れた議會と

いふものに對する失望であります。後の方は最近中央政界及地方政界に於ける自分等の立場の敗北といふことに依つて生じた失望で、それが第二の點にならうかと思ふのであります。

今一つは共產主義及疑似共產主義といふものと自分等が對立するといふことの必要から、それと對立をして行くといふことの爲には、何か對立する強力なものを持つてゐなければならぬ譯である。從來共產主義と對立してゐた表看板は議會主義といふこと、及び言論自由主義といふ風なこと、それを以て共產主義と區別をして來た譯であるのが、それ等に對する失望が加つたとするならば、別のものに依つて共產主義に對する自分等の對立の立場を維持しなければな

らないといふことになる譯である。それが國家主義に寄り懸かるといふ形で現れ、それを助けると共にそれから援助を受けるといふことに依つて、共產主義との對抗勢力を維持して行かうといふことになつたのぢやないかといふ、此三つの理由を私は考へて見たのであります。

併し又社會主義がさういふ風に轉向して來たといふことを別な觀點から見るといふと、一つ考へられることは、マルキシズムといふもの、普及が一應一段落付いたといふことぢやないか、マルキシズムが青年學生及びプロレタリア其他の者に對して宣傳をするといふことが一應段落が付いて、先づ大體常識に於てマルキシズムの何で

あるかといふことは一應分つた。所謂或る普及の飽和状態といふものに達したのである。今ではマルキシズムの言つて居ることは珍しいことゝして、唯々それを知識慾で吸収して居ると云ふことだけで追隨して居つたのが、漸く此處まで來て誰しもマルキシズムに對する一應の常識は吸ひ取つた。次でその一つの批判期に這入つて來た。さうして漸く今マルキシズムに於ける國家觀であるとか、さういふものに對する批判の眼を開き掛けて來たといふことが、一つの理由のやうに考へられるのであります。今一つ考へられることは、最近に於ける國家主義が擡頭して來たといふことに依つて刺戟されて、さうして日本國民の獨自に持つて居る所のものを自覺させられ

たといふこと、日本國民が國家に對する考へ方といふものは、マルキシズムが考へて居る國家觀とは違ふのだ、日本の國民が持つて居る日本の國體に對する觀念は、マルキシズムが持つて居る考へ方とは非常に違ふのだ。日本國民が滿蒙といふものに對する侵略的なことは、英吉利、亞米利加が外國を侵略するのとは違つた意味の、生存の必要の爲であると云つた風な考へ方。是等の事柄が新しく斯ういふ問題を考へさせられて來た。さうすると我が國民獨自の一つの考へ方をして行かなければならないといふことになつて、それを容れて來ると從來のマルキシズムと違つた方向に出なければならぬといふことになつて來てそこで社會主義が國家社會主義の方への轉向

を促されたのではないかといふ風に私は考へたのであります。

斯の如くにして國家主義は最近に擡頭すると共に、社會主義の方に接近した、社會主義は最近に於て國家主義の方に歩み寄つて來たといふこと、兩者の結合で國家社會主義といふものが茲に成立したといふのが、第三の國家社會主義の由來といふことであります。

#### 四 國家社會主義の批判

第四は國家社會主義の批判といふことであります。或る思想を批判するといふ場合に色々の方法があらうと思ふのでありますが一つの行き方は其思想を述べて居る所の人の前提に立つて、其人の述

べて居る所の思想が何處に缺陷があるかといふことを批判するといふことが一つの行き方であらうと思ふ。前提が間違つて居るか間違つて居ないかといふことは後の問題として、兎も角彼自身の採り容れて居る所の前提に暫く此方の身を置いて、さうして此前提を採るならば斯ういふ風な説明をしなければならぬのに拘らず、違つた説明をして居るといふことが不備だといふ風な批判の方法が一つあるかと思ふのであります。今一つは其前提といふものを全く離れてしまつて、此方の批判者の持つて居る所の前提を持つて來て、それで或る一つの思想を批判するといふのが、もう一つの遣り方ぢやないかと思ふのであります。今此場合に於て二つの遣り方を兩方やつて見ようと思ひます。

赤松氏の述べた國家社會主義といふものを暫く赤松氏の述べて居る所の前提の上に立つて、あれで不備があるかどうかといふことを考へますならば、第一に赤松氏は其哲學として國家主義といふことを申しました。即ち國家が第一義的重要性があるといふ思想、所謂國家主義を採るといふことを申しましたが、其國家主義を採るといふことに對して赤松氏は何故國家主義が善いかといふことに對して、どういふ説明をして居るかといふならば、國家といふものは必要缺くべからざる所のものである。命令強制がなければ人間の社會といふものは秩序が保てない、だから國家は存在が必要であるのだ。

斯ういふことで國家主義といふものを理由附けて居るに過ぎないの  
 であります。そこで私の言ひたいと思ふことは、一體國家といふ言  
 葉に吾々は一つの言葉を使つて居るけれども、それに二つの意味が  
 ある譯である。一つの國家といふ意味は命令強制の機關といふこと  
 に吾々は國家といふ言葉を使ふのである。併し此國家といふことは  
 英語に於けるガヴァーメントといふ意味の國家である。それは政府  
 といふやうな日本語に相當する所のもので、個人を命令し強制する  
 所の權力機關といふ意味に於て、吾々は國家といふ一つの言葉を使  
 ふのであります。今一つ國家といふ言葉はカンツリーといふ意味に  
 も使ふのであります。「日本の國家の爲に吾々は命を捨てるのだ」と

か、「亞米利加の國家と日本の國家」とかいふ時に使ふ言葉は、命令  
 強制の機關といふ意味とは全く違つて居る。日本民族が拵へた一つ  
 の集團社會といふ意味の國家である。そこで此同一用語が二つの意  
 味を持つて居るといふことを吾々は區別して考へる必要があるのだ  
 あります。國家主義といふ場合の其國家主義といふのはカンツリー  
 社會といふ意味の國家であります。さういふ社會が第一義的重要さ  
 があるといふのが國家主義であり、個人が第一義的重要さがあると  
 いふのが即ち個人主義であります。國家主義といふ場合に於ける國  
 家といふのはカンツリーといふ意味の國家である。命令強制機關と  
 しての國家といふのは是は別の方の意味の國家である。吾々に對し

て命令強制は必要缺くべからざるものであつて、命令強制の権力がなければ、社會は秩序がない所の實に亂暴狼藉な修羅の巷にならざるを得ない。だから國家が必要になるのだといふ其場合の國家は、命令強制の機關の國家といふ意味である。従つて命令強制の権力が必要であるといふことを證明して見た所で、それは一つの意味の國家が必要になるといふ證明が附いたゞけの話であつて、社會といふ意味の國家が第一義的重要性があるので、個人は手段に過ぎないのだといふ其の國家主義が善いのだといふ證明にはならない譯であります。何故ならば國家といふことの意味が別の意味であるから、片方の國家を證明して必要缺くべからざるものであるといふ風に、權

力といふものを證明して見た所で、社會といふ集團である所の國家が個人よりもつと第一義的のものであるといふ國家主義の方は、少しも證明したことはない譯であります。此論理の飛躍をして、命令強制の権力が必要であるといふことを説明したゞけて、それで直ぐに國家主義といふものが善いものだといふ風にスル／＼と吾々の氣が附かない中に、一つを證明することに依つて他を證明したかの如く錯覺に導いて行くといふ所に、此思想の一つの缺陷があるといふ風に第一に私は考へるのであります。

第二に國民主義といふことを茲で唱へる譯であるが、國民主義といふことゝ對立するものは國際主義といふことであります。吾々が



國際主義と國民主義とを對立させて、何方を採るかといふ場合、國家社會主義者は國民主義といふことを採つて、國際主義を否定して居る譯であります。成程論者の言ふが如く、民族鬭争が吾々の眼の前にあるといふことは確に事實である。又今日のブルジョアジイが國民主義的の考へ方をして來て居るといふことも確かである。やつて居る方策が國民主義的であるといふことも、是も確かでありませす。併し此事は總て一樣に吾々が徒に空想的な國際主義を信奉して居る者に對して、頂門の一針として斯ういふ國民主義的一面があるのだといふことを言ふならば、如何にも尤もであるけれども、併しながら吾々の經濟であるとか文化教養といふ風なものが、總て國民

主義的になつてゐるのだといふ風に考へることも、亦一つの極端から他の極端に走つて居るものであつて、吾々の今日に於ては、或る事が國民主義的になつて居ると共に、或る事が矢張り國際主義的になつて居るといふことで、兩方の場面が交錯して居るのであります。それを國民主義的になつて居る所の或る場面を特に引抜いて來て、總てのものが國民主義的になつて來たと、斯ういふ風に言ふことは事實を間違つて極端に解釋をして居るといふことが一つ言へる譯であります。

そこで又更にもう一つ其問題に付て言ひたいことは、現にブルジョアジイが國民主義的な考へ方をし、プロレタリアが國民主義的な

考へ方をして居るといふことは、假に事實であるとしても、さういふことが事實であるといふことゝ、何故吾々が國民主義的にならざるを得ざるかといふことゝは別の問題である。詰り現に斯ういふ事實があるといふことゝ、其事實が善いといふことゝは別の問題である。其事實が善い、其事が善いといふことの爲には、斯ういふことがあるといふことだけを説明したのでは足りない。それは矢張り何故國民主義が善いかといふことの説明がなければ、國民主義といふことの理窟が立つて居るとは言へない。現代は總て國民主義的になつて居るといふ事實を如何に茲に述べても、其事實はそれを克服しそれを征服してさうして結局國際主義的にならなければならぬか

も知れないのであります。唯々單に事實として國民主義的であるといふことを述べただけでは、何故國民主義が善いのだといふことの證明には少しもならない。是は所謂存在といふことは價值といふことゝは別だといふ區別を、此場合に於て無視して居るといふことが言へる譯であります。

それから今一つの點は、若し赤松氏が社會主義實現の方法として暴力革命と無産者獨裁といふことを採つて居るとするならば——又採つて居ると見られるのであります——採つて居るとするならば何故そこに革命と獨裁が必要であるかといふことの説明がなければならぬ譯である。同氏が議會主義と言論の自由主義といふことを

從來信奉して居つたに拘らず、何故それを捨てなければならなかつたかといふことの説明がなければならぬ筈である。其説明が與へられて居ないといふことは矢張り缺點であると謂はなければならぬのであります。

之を要するに暫く赤松氏の前提の上に立つて吾々が議論をするならば、第一に國家主義といふことの説明が足りない。國民主義といふことに對する理論が足りないといふ風なこと。革命獨裁主義といふことに付て少しも説明がないといふこと。之が赤松氏の前提の上に立つての國家社會主義の理論的の批判であります。

今度は別な方の觀點で、赤松氏の前提を離れてしまつて、私共が

別な自分の立場から國家社會主義を批判するといふことになつたならば、それはどうなるかといふことが、もう一つの批判の方法となり得るのであります。第一に國家主義といふことに對して、私は國家といふ所の一つの集團が第一義的の價值があるものであるといふ風には考へないのであります。斯の如き集團が必要なものであるといふことに付ては別に疑ひがないと思ふのであります。併し吾々に取つて第一義的な重要性を持つて居るのは、各個人が成長するといふことが、第一の重要なものである。各個人の成長の爲には必然に國家と稱する所の集團を營まなければならぬといふことの爲に、吾々は國家といふ手段を必要とするであらうし、又其集團の獨立とい

ふことが危殆に瀕する場合に於ては、吾々は自分の財を抛つても、或る場合には命を投捨て、も、國家の獨立の爲に犠牲にならなければならぬことも認めるけれども、而も尙ほ私共に取つて第一義的な重要さのあることは、社會國家といふ集團にあるのではなくして、吾々自身が如何に自己を成長させて行くかといふことが、第一義的の重要性を持つて居るのであるといふ風に考へるのであります。是はもつと詳しい色々な説明がなければならぬと思ひますけれども、此點に於て吾々に取つて何が最も貴重なものであるかといふことの一つの人生觀が根本的に違ふといふことを一つ謂はなければならぬ此點から言つて私は日本の社會に牢固不拔の勢力を持つて來た此國

家主義といふものを、一たび之が批判をされて、本當の意味の個人主義的のものがもう一遍湧上つて來るといふことが私は必要だといふ風に考へるのであります。是はそれだけで以て可なり重要な問題として説明をしなければならぬことだと思ひますが、一言それだけを申上げて置きます。

それから國民主義に對して吾々はどういふ風に考へるべきかといふならば、國民主義といふことも積極的の國民主義と消極的な國民主義とがあると思ふのであります。自國の經濟とか文化とかいふ事柄に對して、外國から來る所の一つの不當なる壓迫及び影響といふ風なものを排除して、さうして自國は自國の經濟とか文化といふ風

なもの、獨自性を維持して行かうといふことが消極的の國民主義だと思ふのであります。此點に於て私は消極的な意味ならば國民主義に賛成であります。人は何人も此意味に於て國民主義者でなければならぬと思ふのであります。吾々日本の社會の經濟の發達の爲に外國の社會から不當なる強制を受けたり、自國の經濟の發達を外國の社會の爲に犠牲にするといふことを考へる必要もないし、又考へるべきではない。吾々の文化は獨自の發展をしなければならぬのを、徒に外國文化の影響を受けて、獨自の自國の文化といふものを無視して行くといふ風な考へ方をするならば、詰りセンチメンタルな或る國際主義を以て外國文化を徒に隨喜渴仰するといふ者がある

ならば、それは間違ひであります。其意味に於て斯かる外國の經濟及精神文化的方面に於ける不當なる吾々に對する所の侵害を排除するといふ意味に於ては、私は國民主義の消極的方面に賛成である。何人も之に付ては異論があるまいと思ふのであります。問題は國民主義の積極的の方面である。自己の國民の生存權が第一義的であつて、それが爲には他の國は第二義的である。従つて他の社會は我が國民の爲に犠牲になつても好いのだといふ、此國民主義は、所謂侵略主義といふ名稱で呼ばれるものでありまして、此積極的の國民主義を吾々は採ることは出来ないといふ風に考へるのであります。若し吾々が斯の如き積極的の國民主義といふものを採るならば、武力

の下に抑壓されたる外國は暫くそれで我慢してゐようとも、聽て其國の武力が回復すればそれに對する復讐を我國に對して行ふに相違ない。さうしてお互に武力と武力と競争をし、軍備の擴張をすればいふ風なことの爲に奔命に疲れてしまつて、最も重大なる所の吾々の内政の改善とか、各個人の成長といふことが、背景に退かなければならないといふことになる。單に手段たるに過ぎない所の軍備擴張といふ風なことが目的として全面に現れて來て、恰も軍備を整へることの爲に吾々が生きて居るかの如き、主客顛倒のやうなことになるつてしまつて、此事の爲に吾々自身の國民の成長が忽諸に附せられるといふやうな危険が多分にある譯であります。斯の如く國家と

國家が國民と國民とを動かして修羅の巷を現出するといふ風な侵略主義といふものは吾々は排除しなければならぬと思ふのであります。茲に於て吾々の國民主義の批判は、消極的な方面に關しては之を是認しても好いが、積極的の場面、即ち侵略主義といふ形を採つた國民主義は排除しなければならぬといふことになる譯であります。

其次に革命及獨裁主義といふことが善いか惡いかといふことの問題であります。是も亦説明が可なりそれ自身で長く掛る問題であると思ひますが、私は革命主義に斷じて反對であつて、矢張り議會を通じて共同の事務を處理して行かなければならぬといふ議會主義を

主張する者であります。併し此事は中々困難なことで、さういふ議會主義を現代の日本に於て主張するといふことは可なり歩が悪い。それといふのは一つは議會に於ける所の議員の粒が悪いといふことを如何にも辯護しなければならぬかの如き歩の悪い立場に吾々は置かれるといふことの爲に、現代の日本で議會主義を主張する者は一寸窮境に立たなければならぬと思ふのでありますが、併しながらそれは其特定の議員の粒が悪いといふことに過ぎないのであつて、議會主義其もの、本質的のそれが缺陷であるといふことにはならない。議會主義といふ制度が當然に爲し得る限界——多數の人が、五六百人の人が集つて討論をし多數決を採つて行くといふ、さ

ういふ一つの制度は當然一つの缺陷があつて、爲し得る限界——があるのだといふ風な批判も亦ないではないのであります。併しながら之に對しては別に他の方面から來る所の制度を以て補ふことが出來やうかと思ふのであります。例へば議會の外に於ける所のエキスパートといふものを重要視して行くといふことが、之が議會の持つ職能の限界を補ふ一つの改革ではないかといふ風に考へられるのであります。従つて議員の素質を變へるといふ風なこと、それから又選舉法の改正といふ風なこと、議會の職能を如何に補充するかといふ風なこと。是等に關して議會制度に改革の餘地があることは十分に認めなければならぬのであります。而も議會主義といふもの

を吾々は抛棄してはならないと考へるのであります。

何故それでは議會主義が善いか、何故革命主義が悪いのか、斯ういふことを言ふならば可なり色々の説明が詳しく爲されなければならぬと思ひますが、箇條書に述べれば大體三つの點があらうと思ひます。

一つの點は何が國民の幸福であるか、吾々自身の幸福であるかといふことは、吾々の代表者を通して吾々の意思が發表された時に於て始めてそれが判るのだ。如何に偉大なる賢人が茲に出て來て見た所で、複雑なる現代の社會に於て何が國民の幸福であるかといふことは、決して其人に判らう筈がない。國民の幸福が何であるかとい

ふことは、國民自身が自分の意思を發表しなければ、國民の幸福といふことは判らない。即ち國民の意思を發表するといふことは、總選舉の時に吾々の代表者を選ぶといふことに依つて、國民の意思が發表される譯であります。是無くして國民の幸福が何であるかといふことは判らないと思ふのであります。又若し茲に非常なる賢人があつたとしても、人間性の弱さから言つて、其人が一掃權力を持つて、自分の思ふが儘に權力を行使し得るとしたならば、どうしてそれが墮落して、自分自身のみ爲に、或は自己の階級のみ爲に、其權力を使はないといふことを誰が保證することが出来るか。それを監督して行く任務といふことの爲には、矢張り議會といふものが



存在しなければならぬ。之が一つの點であります。

其次に議會に於て議員を選ぶ總選舉といふことは、事實上學校の教壇から國民を教育すると同じやうな一つの教育啓蒙の方法であつて、是で吾々の社會に何が問題であるかといふことの問題を突付けて、國民に其問題を理解せしめ、國民に批判力と判斷力を與へて行くといふことが、總選舉といふものが持つ教育的の一つの職能だと思ふのであります。是で始めて吾々社會の問題を國民が理解してそれを批判することが出来るといふのが、其事自身既に國民の進歩に役立つ譯であります。さういふ心の準備が整へられることに依つて始めて將來の社會といふものを迎へて、それを圓滑に運轉して行く

といふことの内的準備が整ふといふことであります。斯の如く心の準備、理解と批判といふものを経て行くことなしに、突如として革命で社會が變化するといふことであれば、其變つた社會を迎へる準備が缺けて居る。適應するだけの準備工程が行はれて居ないといふことが、革命主義に反對する第二の點であります。

第三の點は革命を行ふといふことになるならば、國民の少數の者が權力を行ふことに依つて社會の組織が變るのである。斯ういふことであるならば、社會の大多數は依然として元の木阿彌である。少數の者だけが社會の組織を引繰返したといふことになるのでありますから、大多數は依然元の木阿彌であるが爲に、又反革命が起つた

時には直ぐそつちの方に靡くといふ危険性がある。斯の如くして革命に依つて社會が變つた場合に於ては、反革命の來る危険が絶えずある。それを防止するといふことの爲には餘程強大なる所の武力を以て、國民を絶えず彈壓し續けてゐなければ、其社會を維持して行くことは困難だといふ事になるのであります。斯の如く彈壓を續けて行くなれば、反革命はそれでは防ぎ得るかも知れないけれども、國民を奴隸視し國民を愚かなるものとして、それで彈壓を續けて行くならば、反革命は防ぎ得るかも知れないけれども、それは國民の自由を非常に妨げるものであるといふ風に考へるのであります。

以上の三點が、革命主義に反對する私の議會主義の論據であります。

す。

獨裁主義といふものに反對をして、言論である限りは總て自由を與へなければならぬといふ、言論自由主義といふもの、論據も亦三點あるかと思ふのであります。各人をして思つて居ることを十分に言はせるといふことの中から、始めて本當の善い思想といふものが現れて來るのだ。一つの或る標準で言論を壓迫するといふことであるならば、臆て現るべき善い思想といふものはそこに現るべき術がないといふことが、一つの言論壓迫の弊害である。更に其次に於ては、吾々に色々の思想が對立して來るといふことの中から自分等の思想を批判し、互に調和した、より善き思想がそこから生れて來

るといふことになる譯であります。唯々一つ思想だけを殘して他の思想を亡ぼしてしまふといふことであるならば、其殘つて居る思想から本當に自己を反省し批判をして行くといふ進歩の可能性がそこで止まるといふことであります。それ等の理由が獨裁といふことに對して反對をする理由になる譯であります。

之を要するに國家社會主義に對する批判は、一つは赤松氏の前提に於て批判することが出來、一つは別な吾々の立場に依つて國家社會主義を批判することが出來ると思ふのであります。

## 五 國家社會主義の歴史的意義

最後に國家社會主義の歴史的意義といふことであります。茲に述べて居る言葉が少し大き過ぎたことになりましたが、私は國家社會主義といふものは相當の勢力を以て將來の日本に繼續するだらうといふ見込を附けるのであります。何故ならば此國家社會主義といふものを懷く所の人達はどういふ人達であるかといふならば、第一に軍部の人達が之に共鳴し得る、官僚といふものが之に共鳴をし得る。此軍部官僚に次いで小商人小農といふ風な中産階級といふものが又之に共鳴し得る。更に多くのインテリゲンチヤが之に共鳴し得るといふ風に考へるのであります。何故是等の人々が共鳴し得るかといふならば、國家主義といふものは日本人全體に瀰漫した考へ方であ

るといふ、さういふ一般的の理由を除いても、資本主義國として最も、能く全般に發達して來た所の英吉利のやうな社會に於ては、社會がブルジョアジイとプロレタリアといふ風に劃然として二つの社會に分れて居ると思ふのでありますが、獨逸とか日本とかいふ風な資本主義の發達が稍々遅れて居る所の國に於ては、社會はブルジョアジイとプロレタリアといふ風に劃然と分れて居ないので、其兩階級の外に立つて居る所の第三の一つのものがあると思ふのであります。是れ即ち軍部といふ風なもの、官僚といふ風なもの、それ等は必ずしも資本家階級に屬しもせず、それかと言つてプロレタリア階級にも屬しない。何れの思想にも加擔しないで、兩者に對して公明

な超階級的な立場を採つて行かうといふ風な考へ方をし易いものであります。更に小農小商人といふものは、是も資本家階級にも屬せず、又プロレタリア階級にも屬しない所の一つの間階級の人々であります。之が日本の資本主義のやうに、英吉利の如く發達しない國に於ては、小農、小商人及び手工業者といふもの、數は相當多くて、社會に於ける所の存在は可なり強力であると思ふのであります。即ち資本家階級に必ずしも共鳴しないし、又プロレタリア階級にも必ずしも追従しない独自の立場がある。此中に國家社會主義といふものは必ず勢力を持ち得ると私は考へるのであります。更にインテリゲンチヤといふものは、國家主義的の要素は可なり小さい時

分から染込んで居るし、何か新しい——現代に於ては國家主義といふことだけでなしに——社會問題的意義がそこに附加はるものでなければ賛成が出来ないといふ要求が一つある譯であります。古くから根柢深く培はれた國家主義といふものと、新しく採り容れた社會主義とを結付けた國家社會主義といふものは、多くのインテリゲンチヤといふものゝ中に一つの共鳴を持ち得ると思ふのであります。即ち國家主義は古いといふことの故に懐しさを感じしめ、社會主義は新しいといふことの故に追従を感じしめる、其兩面の意味が多くのインテリゲンチヤを國家社會主義に結付けると思ふのであります。従つて國家社會主義は相當の勢力を將來に於ても繼續し得るも

のと思ふのであります。

併し遠き將來はどうなるかと言へば、元來國家主義といふものと社會主義とは一緒にならないものであると思ふのであります。國家といふ統一的な社會を第一義的な重要性があるものだと感じず。さういふ國家主義といふものは、統一といふことゝ全體といふことに主力を傾注して行くといふことになる。其立場から言ふならば、階級が對立してさうして社會の内部に闘争をやつて行くといふ風な社會主義は、統一に弊害があり、而して全體といふことを紊すものであるといふことになる譯であつて、本當に國家主義に忠實であつたならば、統一の前には階級といふやうなものは小さいものとなり、

個人といふ風なものは小さいものとなつて、社會主義的な見解は本當は國家主義とは相容れないものだと思へるのであつて、是は相容るべからざる所の矛盾した國家主義と社會主義といふものが暫くくつ附くかの如き外觀を呈して、そこに國家社會主義といふ一つの畸形な産物が出来てゐるのだと思ふのであります。恰も吳と越とが同舟して、暫く或る所まで一緒に行くが、聽てお互に吳と越であると、いふことの違つた意識を持つた時に、當然別れねばならぬ運命を擔つて居るのである、早晩是は分解して行くべきものだといふ風に考へるけれども、併し同舟の吳越が吳と越とは違ふものだといふことを意識するまでには相當の時間を経過しなければならぬ。其時間が

經過するまでは是は可なり繼續するものだと思ふのであります。最近に於て國家社會主義が擡頭して、可なり強力なものとして相當長い間繼續するであらうといふ其事から、私共が何を學ぶかと言へば、如何に日本人の中に巢食つて居る國家主義が牢固不拔な精神を持つて居るものであるかといふことを私共は今更の如く茲で氣附かせられたといふことが一つあるのであります、それだけ兎に角國家主義的傾向が日本人には強いのだといふことを、それに賛成する者もそれに反對する者も、事實として之を認識しなければいけないのだ。認識するべく餘儀ない程に國家主義が強力であるといふことを、吾々の目の前で私共に示した譯であります。

今一つのはマルキシズムといふものに雷同して、一々マルキシズムに附和雷同し追隨して居つた時期が漸く去つた。マルキシズムの中に育つて來た者がマルキシズムに反逆を企て、或は批判をして來る者が段々出て來たといふのは、其現れだと私は思ふのであります。其意味に於て日本のマルキシズムが今は第一期の宣傳の時期が去つて、漸く靜思してマルキシズムと日本とを如何に結付けるかといふ一つの第二期の批判期に這入りつゝあることを示すものであるといふ風に考へるのであります。

此國家主義が今更の如く強力なものであるといふことを自覺させられたといふこと、マルキシズムの中からそれを批判する者が出て

來たといふことは、吾々思想の研究者に取つては非常に興味のある問題であると思ふのであります。

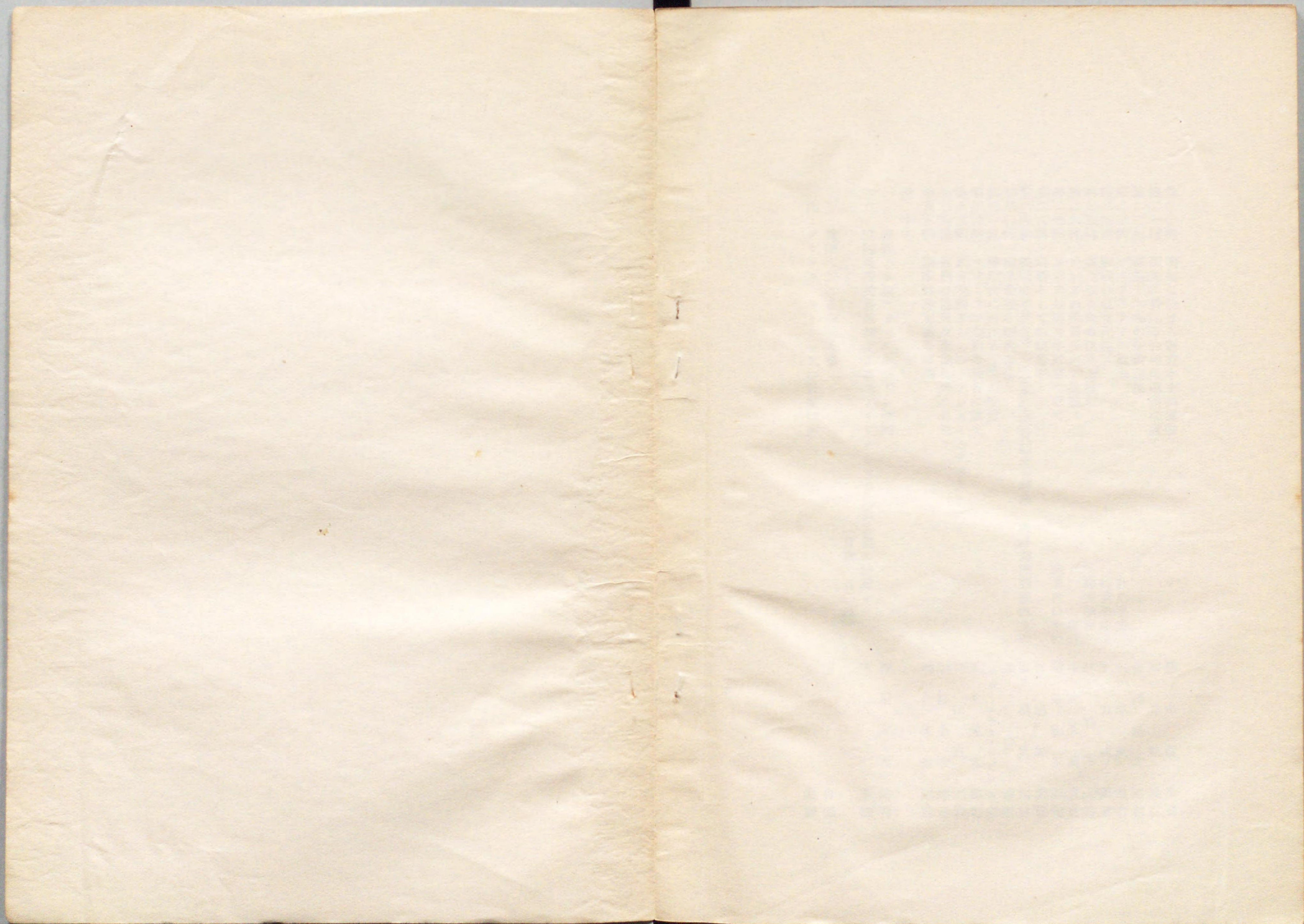
大變長い間、殊に最後の所は意を盡せない程端折りまして、大變お粗末な講演を致しまして失禮致しました。

— 完 —

既刊叢書 (非賣品)

第一輯	日本に於ける工業發達の特性並之より生ずる諸種の困難と問題	法學博士	アルフレッド・アモン
第二輯	現代社會經濟思潮に就て	法學博士	鹽澤昌貞
第三輯	戦後に於ける諸國の商業政策の基調	法學博士	河津昌
第四輯	日本の國體と經濟組織	經濟學博士	永井信
第五輯	近世社會主義學說に就て	法學博士	小泉信三
第六輯	現代政治の根本問題	法學博士	吉野造
第七輯	資本主義經濟社會に於ける財政の機能	經濟學博士	土野美
第八輯	銀行券兌換制度に就て	法學博士	山崎成郎
第九輯	能率の根本義	法學博士	ハリーントン・エマースン
第一〇輯	科學的管理法の實施に要する準備	理學博士	エッチ・キング・ハタウエイ
第一一輯	財界觀測の理論と我財界の前途	理學博士	石田貞次
第一二輯	アインスタインの新學說に就て	理學博士	勝原純
第一三輯	新軍縮の表裏	理學博士	伊藤正徳
第一四輯	金解禁の本邦産業に及ぼす影響	理學博士	高橋正徳
第一五輯	各國の租稅制度の趨勢に就て	理學博士	藤井眞
第一六輯	經營經濟學より觀たる産業合理化	理學博士	向井眞
第一七輯	産業の合理化問題に就て	理學博士	松岡均
第一八輯	地方稅制に就て	理學博士	中野廣
第一九輯	我國工業の合理化	法學博士	男爵 吉田信次





本「パンフレット」の寸法は商工省工業品規格統一調査會決定に係る「紙ノ仕上寸法規格」中のB列6番(128mm×182mm)に準據したるものである

(以印刷代謄寫)